

今週の為替相場見通し(2022年11月7日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		145.68 ~ 148.84	146.67	144.00 ~ 150.00
ユーロ	(ドル)		0.9730 ~ 0.9976	0.9960	0.9900 ~ 1.0050
(1ユーロ=)	(円)		144.05 ~ 147.67	146.07	145.00 ~ 148.00
英ポンド	(ドル)		1.1150 ~ 1.1615	1.1372	1.1100 ~ 1.1700
(1英ポンド=)	(円)	*	165.10 ~ 172.13	166.84	161.00 ~ 169.00
豪ドル	(ドル)		0.6273 ~ 0.6493	0.6470	0.6250 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	92.97 ~ 95.56	94.87	92.50 ~ 96.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 小野崎 順基

(1)今週の予想レンジ: 144.00 ~ 150.00 円

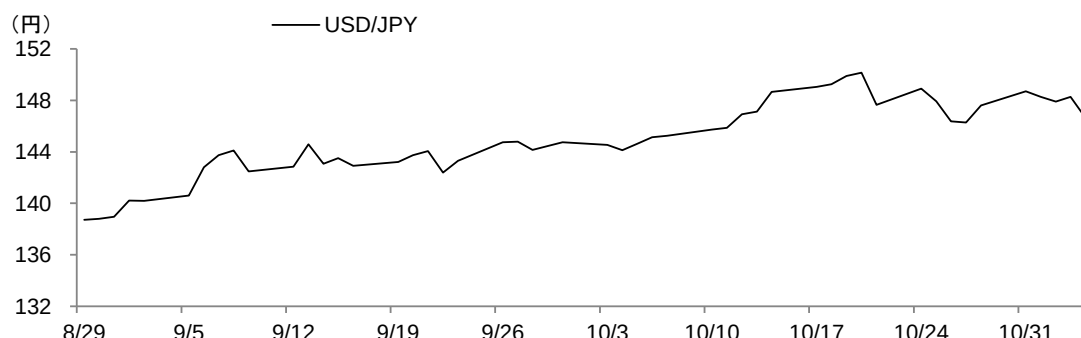
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は振れ幅と伴いながらも堅調推移した。週初31日、147.80円でオープンしたドル/円は一時下げ幅を広げるも、米金利上昇を背景にドル買いが加速、一時週高値の148.84円まで急上昇。1日はポジション調整の動きや米金利低下を受けドル売り優勢となり、一時147円台を割り込むも、その後の米10月ISM製造業景気指数の市場予想を上回る結果に米金利が急上昇し148円台前半まで急伸した。2日はFOMCを海外時間に控える中、利上げペース減速を予想する動きから米金利低下し、一時147円台を割り込んだ後、海外時間に入り米10月ADP雇用統計の結果に147円台前半まで回復。FOMCでは予想通り大幅利上げしたもの、その後のパウエルFRB議長の発言内容を受けて、次回会合での利上げペース鈍化観測が高まると、一時週安値の145.68円まで急落。ただ、利上げ停止に対しては慎重な姿勢示したことでドル買いが加速し147円台後半まで急反発した。3日は北朝鮮によるミサイル発射の報道を受けリスク回避の円買いが強まり147円台前半まで下落。その後は米長期金利の動きを眺めながらドル買いが強まり148円台半ばまで上昇した。4日には米10月雇用統計が予想を上回る結果となるも失業率は予想比弱めの結果。指標発表後は米長期金利の低下とともに146円台半ばまで下落。その後は147円台まで持ち直す場面も見られたが146.67円でクローズ。

今週のドル/円は上値の重い展開を予想する。8日(火)には米国中間選挙が実施されるが民主党が敗れる可能性も警戒されている。ねじれ議会となる結果、もしくは上下院共に共和党が多数派となる結果となると今後の政策運営の難航懸念からドル売り材料となるか。また、10日(木)の10月消費者物価指数(CPI)は9.1%、8.5%、8.3%、8.2%(6月~9月/前年比)からさらに鈍化が見込まれている。予想通り鈍化の結果となれば12月FOMCでの50bp利上げが想定されドル/円の上値を抑える結果となりそう。一方で予想比強めの結果となれば75bp利上げが想定されることとなりドル買い材料となるか。また、150円台に乗せる展開の際には本邦からの為替介入も警戒される。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/31~11/4)の値動き: 安値 145.68 円 高値 148.84 円 終値 146.67 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 大橋 開

(1) 今週の予想レンジ: 0.9900 ~ 1.0050 145.00 ~ 148.00 円

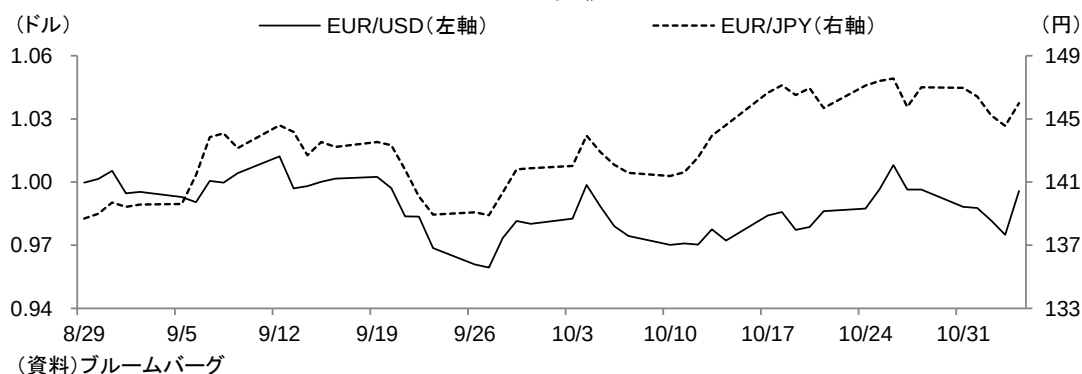
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロは小幅上昇。週初0.9955付近でオープン。欧10月HICPは堅調な結果だったものの市場では予想対比上振れることは織り込み済みだったのか反応は限定的。その後米金利上昇が重しとなり、0.98台後半まで下落。1日、元当局者による中国人民銀行の為替介入に関する報道を受けてドル売り優勢、ユーロはじり高に推移。一方、米重要経済指標が予想対比上振れるとドル買い優勢となり0.9870付近まで下落。2日、FOMC前でポジション調整の売買が交錯する中、レンジで推移。FOMC声明文発表直後は、12月に向けて利上げペース減速が示唆されたことで、ドル売りの流れとなり週高値となる0.9976まで上昇。一方、その後パウエルFRB議長から利上げペースと金利水準の議論を区別しつつ、利上げを継続して十分に制限的な水準に引き上げる必要性が強調されたことで、市場はタカ派と捉えドル買い・ユーロ売りに反転、0.98台前半まで下落。3日、前日のタカ派的な内容となったパウエル議長記者会見を受けて米金利の先高感が意識されやすくドル買い優勢となり週間安値の0.9730をつける。4日、BOEが緊急ギルツ買いオペのアンバインド詳細を近々公表するとの報道を受けて、英国債は一気に金利上昇、欧州債にも波及。更に堅調な米10月雇用統計を受けて、初動はドル買い優勢となるも米10月失業率が上昇したこと・来年の米ターミナルレートが5.25%近辺まで織り込み済み等から米金利低下・ドル売りに反転し、ユーロはじりじりと値を上げていき0.9960で越週した。

今週のユーロは上昇する展開を想定。今週の欧州固有の材料を挙げると7日に控えるラガルドECB総裁の会見である。先週末、ラガルド総裁は「低成長だけではインフレは大きく落ちない」、「賃金はある程度インフレとキャッチアップして上昇する可能性が高い」と言及し、素直に欧州債は金利上昇・ユーロ買いで反応。賃金インフレに対する見方が二次的波及をやや容認する方向にシフトしてきており、ラガルド総裁の講演前後での欧州発の金利上昇に伴うユーロ買いに繋がるのかに注意。短期的な水準の目安としては100日移動平均の1.0052になるか。一方でユーロ安を生み出す可能性のある材料としては10日に発表を控える米10月CPIである。物価上昇が粘着的なサービス価格主導になってきていることを踏まえて上振れる可能性がある。米9月コアCPI結果と同様に市場予想対比上振れる場合には利上げペース鈍化期待が後退し、市場のFOMC12月利上げ織り込み(OIS)は現行の約57bpから75bpへと急速に織り込みが加速することが想定され、ドル買い優勢に伴うユーロ安の展開には要留意。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/31~11/4)の値動き: (対ドル) 安値 0.9730 高値 0.9976 終値 0.9960
(対円) 安値 144.05 高値 147.67 終値 146.07



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.1100 ~ 1.1700 161.00 ~ 169.00 円

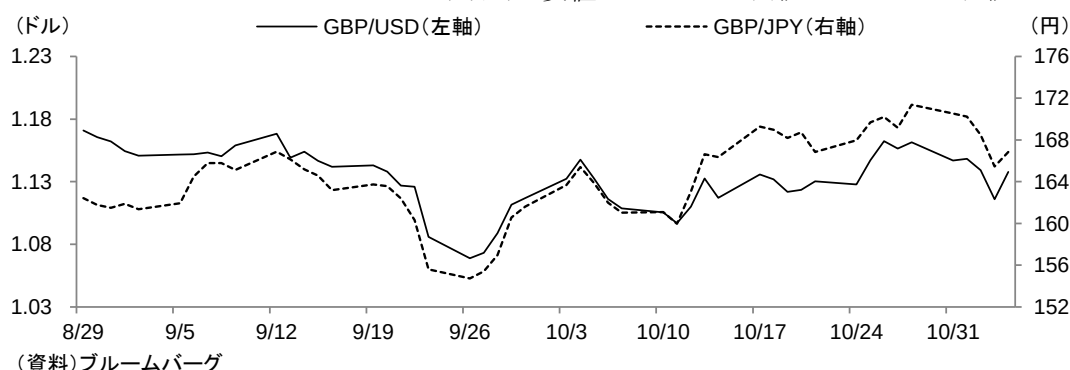
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は下落。週初31日は1.16近辺で始まるがドル買いに押され1.15を割れる。翌1日はFOMCを前に米金融政策への軟化懸念もあって米金利が低下する中で1.15台半ばまで買い戻されるが、米10月ISM製造業景況指数が予想を上回ると再び1.14台へ反落。英中銀が量的引き締め(QT)を開始し7.5億ポンド分の国債売却をしたことはポンドには影響がなかった。2日は米FOMCが予想通り0.75%利上げとなると当初はドル売りとなり1.15台半ばへ買い戻される場面もあったが、FOMCのメッセージが消化されると一転ドル買いに。ポンドは翌3日には1.11台まで下落。英中銀は予想通り0.75%利上げをし14年ぶりに3%となったが、「今後の利上げは市場織込みよりも低くなる」との中銀コメントでポンドは売られた。4日は米10月非農業部門雇用者数が予想を大きく上回りドル買いとなるが、ポンドは昨日安値と同レベルの1.1150で反発すると今度は1.13台まで買い戻された。対円では31日に一時172円台を記録したが、その後は一本調子で165円台まで下落し166円近辺で週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は、引き続きボラタイルな展開を予想。英中銀イベントを通過後、やはり次の注目は17日の予算案発表で、今週は英国内からはやや材料難の週となりドル要因での動きが見込まれる。一点挙げるとすると金融市場で話題になりそうなものは7日に予定される英中銀の保有国債の売却か。1日に主要中銀として初めて行われた「量的緩和で購入した国債の(ある意味でアグレッシブな)売却」は大きな混乱はなかった。今回は対象がより長期のもの(7-20年)となり、英国債市場への影響を警戒する向きがある。英中銀は3日の会合で利上げのターミナルレート(最終レート)が市場織込みよりも低くなると予言したが、英経済混乱の要因の1つであるモーゲージ金利の点からも理解しやすい。というのも英国では短期でモーゲージを組むことが多く、どちらかというと短期金利の影響が大きいとされる。金融引き締めとして政策金利の利上げではなく、QTでより長期の金利に影響をしながら引き締め効果を狙う意図もあるとみられる。なお、かかる英中銀の声明を受け、金利先物市場で織り込まれるターミナルレートはおおよそ4.7%程度と10月半ば時点より約0.5%程度低くなっている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/31~11/4)の値動き: (対ドル) 安値 1.1150 高値 1.1615 終値 1.1372
(対円) 安値 165.10 高値 172.13 終値 166.84



4. 豪ドル

金融市場部 木村 優太

(1) 今週の予想レンジ: 0.6250 ~ 0.6600 92.50 ~ 96.00 円

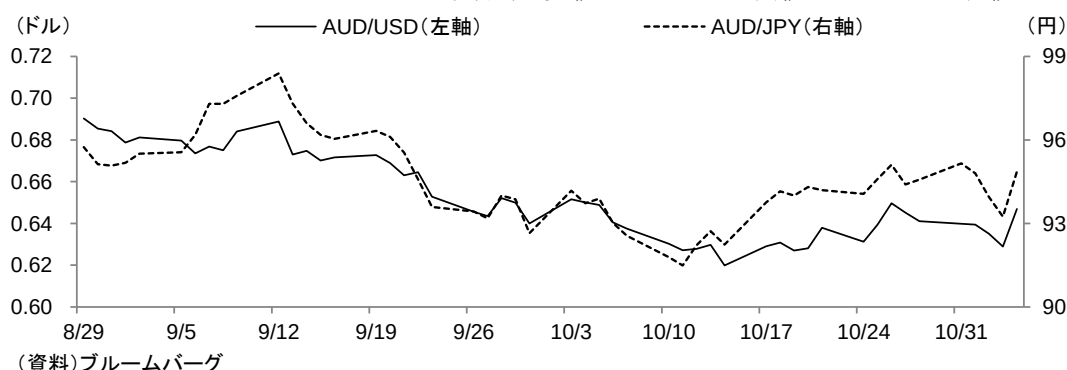
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は往って来いで推移。週初10/31は0.6400近辺でスタート。発表された豪9月小売売上高が9か月連続の上昇となり、インフレや利上げに家計消費が対応できていることが意識され0.6428まで小幅に上昇するも、翌日にRBA会合を控えて値幅は限定的となり、海外時間は月末のドル買い需要に押されて反落し、オープンと同水準に戻す。11/1は開催されたRBA会合にて市場予想通りの25bp利上げが行われたうえ、声明文では年末までにCPIのピークが8%を迎えることが予想されて利上げ継続意識されたことにより、海外時間に0.6464まで上昇。その後発表された米10月ISM製造業景気指数や米求人数が市場予想を上回ったことで米金利が反発したことによるドル買いの流れから0.64割れの水準まで下落した。11/2はFOMC前のアジア・ロンドン時間は0.64前半での小動き。FOMCでは市場予想通り75bpの利上げが発表されるも、声明文の内容がハト派と受け止められ一時ドル売りに反応し週高値の0.6493まで上昇するが、パウエルFRB議長会見では利上げ停止の検討は時期尚早という見方が伝わり、米金利が反転するとAUD/USDは0.63半ばまで反落した。11/3も中銀の利上げスタンスの対比構造からドル買いの流れが継続し、週安値の0.6273まで下落したのち、0.62後半を中心とした推移となる。11/4は中国でのコロナ対策緩和期待につられてAUDにも買いが入り、0.63半ば近辺まで上昇。そして発表された米10月雇用統計は非農業部門雇用者数が予想を上回り一時ドル買いが進んだが、失業率や平均時給は冴えないものであることから米金利は徐々に低下し、それに伴いAUDが一段上昇し、0.6470までつけて0.63半ば近辺での越週となった。

今週の豪ドル相場は米10月CPIの結果を待ちつつ底堅い推移を予想。今週は11/8(火)に豪11月ウェストバック消費者信頼感指数、NAB企業景況/信頼感の発表を控える。先週発表された豪9月小売売上高は予想を小幅に上回っており、RBA会合も利上げペース減退の動きが確認されたことため、インフレに賃金上昇が追い付いていない状況は変わらないものの、利上げによるオーバーキルの懸念は減退している。また中国でのコロナ対策の水際政策を緩和する動きは、経済的関係性の強い豪州にも追い風と思われる。一方の米国では米10月CPIの発表を11/10(木)に控えており、Fedがインフレ抑制を確認できるまで利上げを継続する姿勢であることから非常に注目度が高く、発表までは動きにくいだろう。CPIの結果が市場予想を上回り、一段の米金利上昇が見込まれる場合、AUDは下落に転換する懸念があり、その場合先週の下値の水準である0.6270がサポートラインとして意識されるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/31~11/4)の値動き: (対ドル) 安値 0.6273 高値 0.6493 終値 0.6470
(対円) 安値 92.97 高値 95.56 終値 94.87



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。